

京劇・男旦の自己改革から中国「近代」を考える

——田村容子著『男旦（おんながた）とモダンガール——
二〇世紀中国における京劇の現代化』を読んで

宮内 肇

はじめに

本書の特徴は、京劇のテーマ性やテキスト分析、男旦をめぐる女性・ジェンダーの観点からの考察、あるいは近代中国における演劇とメディアや観客のまなざしとの関わりなど、多様な視点で読み解くことができることにある。ただ、これまで京劇とはほぼ無縁であった筆者には、本書を評論する資格も実力もない。そこで、小論では、本書を文学・文化研究の枠組みを越えて、広く中国の「近代」を考える視点から読み解けないのかを論じてみたい。

本書に関しては、すでに数篇の詳細な書評が発表されているが、これらの書評において、本書が論じる京劇・男旦の「現代化」に対する認識には、微妙な相違があるように思われる。例えば、藤野真子氏は京劇演者における身体の「交替」を、演劇構造に関わる「決定的な転換」と表現し^①、平林宣和氏は女優の誕生という「攪乱」

が京劇に「化学反応」をもたらしたと論じる^②。両氏は伝統京劇の近代における変化の大きさあるいは激しさを強調する。他方、三須祐介氏は戯曲がその形態の外にあった女性と身体性を再発見した経緯を『ざわめいて』^③「いく過程」と述べ、変化の激しさよりも柔らかな表現を用いる^④。また、中塚亮氏は「現代化という格闘」と言表し、主体的な変化とその際の懸命に苦悩する感情を読み解こうとする^⑤。

こうした表現の相違は、加部勇一郎氏が評するように、本書が京劇の「変容」におけるさまざまな「すでにあるもの」と「外から来たもの」との「対立」を、多彩な階調として論じたことに起因するのではないか^⑥。その結果、読者によって京劇・男旦の「現代化」の解釈に微妙な温度差を生んでいるように思われる。そして、この温度差の先に、近代中国における伝統性、換言すれば、中国における「近代」の特異性を思索する糸口があるのではないかと漠然ながら考えた。

ところで、筆者も本書の読了後に京劇・男旦の変容に対し、「格闘」に似た印象を受けた。すなわち、伝統京劇とりわけ男旦が、女優やモダンガール、機械仕掛けの舞台装置などの「近代」に接し、また、市井の人々が新たな興味・関心を持つようになった近代社会のなかで、自己改革を志向し、いかにして新たな自己の価値を見出すとしたのか、そして、その「苦悩」を動態的に描き出したことが、本書の魅力ではないかと感じた。そこで小論では、本書の内容を男旦あるいは京劇の当事者の「苦悩」という視点から動態的に読み解き、その歴史的意義について考えるときにも、近代中国における伝統性のありよう、「近代」の特異性を考える可能性を探ってみたい。

一、京劇・男旦の自己改革とその歴史的意義

まず、男旦による最初の自己改革は時装戯であろう。容色や発声といった自然な女性らしさや、女性としてありのままの演技ができる女優や坤劇の登場は、女性の身体に対する視覚的な好奇心や興味という新たなまなざしを観客に生じさせた。これに対して梅蘭芳は、流行女優の服装で伝統的な男旦の演技をする。時装戯の誕生の背景には、女優に対する評価の基準が男旦にあり、かつ男旦劇の演劇的価値の優位性において、男旦あるいは京劇の伝統的な価値が持続していたことがあった。

ただ、都市を中心とする娯楽文化が広く生み出された一九二〇年代において、女優の可能性はさらに開花していく。新聞・雑誌での女優をめぐる菊選や筆戦などの商業戦略や、遊技場内に新設された

劇場にて安価で気軽に女子新劇を鑑賞する潮流が、女優が庶民の手が届く欲望や消費の対象になりつつ、社会とりわけ都市生活に浸透していく。そして、この潮流は、伝統としての京劇・男旦にとってある種の危機をもたらす。さらに、近代的な舞台装置や実物の小道具の使用は、その写実性への志向から伝統劇との不調和が指摘され、伝統京劇は、この矛盾をいかに解決するのが問われることになる。ここに京劇は「機関佈景」を用いて、写実的ではあるものの非現実的な空間を舞台上に創出し、時装戯という女優の真似を封印し、古来の「男が扮する女」の身体美を演じる。古装戯の誕生である。

こうした「伝統」の表現者が「苦悩」の末に結実させた古装戯は、女優のまねごとを越え、男旦による古来の身体美を「本物そっくり」な写実的演技へ昇華させた。むろん、この身体美は「伝統京劇のつくりごと」であり、これを近代的な舞台装置により「真に見せた」ことが古装戯の真価であった。すなわち、京劇・男旦は、伝統的な京劇の演技と近代的な舞台装置とは調和しないという批判を克服し、新たな「伝統」を創造する自己改革に成功したと言える。終章にて論じられるモダンガールの心の奥底までを演じた『潘金蓮』での欧陽予倩の演技は、男旦が演技形式（型）を打破することで、京劇に新たな意味を与えた価値創造であったと言える。

そして、京劇・男旦の自己改革は、一九三〇年代以降の抗日による「愛国」要請と結びついた伝統文化の再考や中国固有文化の創出という思潮のなかで、さらなる展開を見せる。欧陽予倩と同様に人の内面を演技に融合させた周信芳の『明末遺恨』は、国防の意義を持つ旧劇として、伝統劇に「現代性」を包含させることで好評を得る。また、このことが同名の題目かつ歴史劇であるという共通点以

外は、劇種・主人公の性別も異なる話劇『明末遺恨（碧血花）』が人気を博する要因となる。ここで特筆すべきは、京劇が演劇界において社会的な地位と機能を獲得したことにある。抗日という特殊な状況下で、さまざまな劇種が相互に影響し合い、そのなかで男旦の演技もまた重要な役割を果たしたが、そのためには従前の時装戯や古装戯の創出という自己改革を経験する必要があったとも言い得よう。

では、こうした京劇・男旦による自己改革を、近代中国の歴史展開に照らし合わせたときに、いかに理解することができるのだろうか。筆者が本書を通じて読み取った伝統京劇・男旦の自己改革の歴史的意義とは、「近代」との接触により自己が存続の危機に直面するも、他者を受容し自己を変革することにより、国内外の評論あるいは観客によって新たな価値が見出され、これにより自己を継承する原動力となったことにあると考える。女優の誕生による観劇の新たな視点に対し、男旦は女優の模写をすることから始めるが、身体的な限界もさることながら演技の型を変えてしまうことは、男旦としての自己矛盾を生じさせることになる。男旦の価値の追求はまさに時装戯を経験しなければ生じなかつたのかもしれない。

この経験こそが男旦は女性を演じる役者ではなく、ひとりの表現者であることの気づきをもたらした。欧陽予倩が潘金蓮を通してモダンガールの主体性と脆弱な自尊心という両義性、すなわち、彼女の心の奥底を表現した演技は、女性を演じることを越えて社会に生きる人々の内面を表現したものであり、周信芳の「分析にもとづく人物造形」も、表現者としての男旦の自己改革と同質のものである。また、その際に、近代的な舞台装置や近代劇の分幕制を受容し

たり、異なる劇種が相互に影響し合ったりしたことも留意すべきである。こうして京劇・男旦の「伝統」は、近代中国において見事に変容し新たな「伝統」へ脱皮したのである。

二、近代中国における宗族結合の自己改革 ——京劇・男旦の歴史的意義の相対化

さて、こうした京劇・男旦の伝統的な価値の近代における変容は、中国の「近代」とは何だったのかという命題を考える際の素材として、いかなる有意性を持つのであろうか。このことを考えるためには、京劇・男旦の歴史的意義に類似する、あるいは相違する事例と照らし合わせてみる必要がある。そこで、比較対照として宗族を取り上げてみたい。

なぜ宗族なのか。ここでの宗族とは、明朝後期以降に父系出自を統制し、祖先祭祀を行う祠堂（祖廟・宗祠）の建設、同族の歴史を子孫へ伝承する族譜（家譜）、族人子弟の教育と救済を目的とした族産（共有財）の管理を通じて、同族を維持・発展させる血縁集団である。これを伝統京劇・男旦と較べてみると、前者は血縁的集団であるのに対し、後者は職業的／営業的な集団であり、両者が同質の集団であるとは言い難い。しかし、一方で「伝統」を継承するという目的を持つ集団としての類似性があるようにも思われる。では、宗族は「近代」との接触によりいかなる変容を見せたのであろうか。清朝末期以降の革命論や国民統合の議論、あるいは「社会主義」思潮のなかで、従前、宗族は「伝統的」・「封建的」として批判・

排除の対象となり衰退・瓦解していくものとしてとらえられてきた。他方、近年では宗族の実社会との関わり、または宗族内部の思惑から、近代社会におけるその持続性に関心が向けられてきた。むろん、この持続性は、金太郎飴のように伝統的な宗族がいつの時期においても存続していたという事実の解明ではなく、近現代中国の社会変動に適応していく姿である。

例えば、清末以降の地域社会では、おもに日本経由で受容された近代的な地方自治が実施されたが、宗族結合は科挙に代わる同族発展の手段としてこの「近代」制度を受容し、宗族と自治とを結びつける。つまり、近代社会のなかに、従来の自己の存在を組み込むことで、その存続を図ったのである。こうした宗族が近代国家による政策に相対したときに、政策を主体的に消化し、同時に自己のありようを変化させつつ新たな社会のなかで自己を存続させていった事例は、その後の国民党政権期においても見出すことができる。福建省を考察対象とした研究では、同族による族産管理を放棄しつつも、同族としての精神的統合を維持することで、土地革命という劇薬ではなく、公田の土地慣行を活かし土地の村公有制を実施したことが論じられる。このことは宗族が社会状況に適した自己の生存方法を模索し、為政者の意向に沿って族産を公有財産へと制度化した行動であったと言えよう。また、匪賊・械闘・革命などによる暴力がもたらした社会混乱から近代華南地域の基層社会の実態を考察した研究では、宗族結合が自己を保護する対象のひとつとして機能し続けたことが指摘される。

次に、宗族内部に視点を向けてみよう。伝統的な宗族・家族から離脱し、自己の自由な意思を尊重する価値観は新文化運動期に高揚

するが、その際に批判の対象となったのは父子間の尊卑、または尊卑長幼にもとづく父系出自としての宗族の伝統性であった、必ずしも集団としての宗族・家族にあったわけではなかった。その結果、とりわけ「近代」思潮の影響を受けた青年同族は、伝統的な宗族を批判し新たな社会に適した宗族改革、すなわち自己改革を主張するようになるが、この改革は宗族という集団を否定するものではなく、却って新しい時代において自己が離郷や就業といった社会上昇・自己実現をするための自己資本としての改革であった。

近代国家による国民統合を目的とした政策とそれがもたらした社会不安、また、新文化運動に象徴される新思潮の隆盛といった「近代」社会のなかで、伝統としての宗族はこれを受け入れることを通じて、自己の存在価値を模索した。こうした自己改革により、基層社会に生きる人々の生存と繁栄を扶助する社会的機能が見出された。

おわりに——「伝統」に社会的機能が備わる

そもそも京劇・男旦と宗族とを並べて、その集団性や目的に類似性を求めることは困難で無意味であろう。しかし、両者は伝統中国における集団として、清末以降の社会変化のなかで自らの存在価値を急激に低下させ、その処し方が問われる経験をする。これにより、宗族は自己の生存や上昇を保障する社会的機能という価値を発見あるいは再認識し、自己改革を通じて宗族を継承していく。こうした視点に立てば、梅蘭芳や欧陽予倩などによる女優とは異なる新

たな「おんながた」の追求や周信芳の人物造形による演技も、男旦・京劇を継承するための「伝統」の自己改革であったと言い得よう。そして、この改革により新たな「伝統」へと脱皮した京劇は、社会に生きる人々のさまざまな想いを観客と共有することで、ある種の社会における一体感を醸成させる社会的機能を備えていく。

ここに両者の共通項が見出されるように思われる。すなわち、個人の生存と繁栄を支える新たな宗族とその個人の想いを表出する新たな京劇という、人々へのまなざしを持ちつつ社会的機能を帯びる公的な役割を担う共通性である。そして、ここに近代中国における広義の制度や習慣といった社会システムの伝統性のありようと、文化・芸術のありようには、何かしらの関連性もしくは連環について比較検討を試みる可能性があるようにも思われる。そして、こうした検討の先に、新たな近代中国の特質を提示する可能性が生まれるのではないだろうか。

削足適履な議論であることは重々承知している。ただ、本書が論じたさまざまな意義が、中国文学とその隣接分野にて共有され、議論されるだけではあまりにも惜しい。今後、本書がさらに多くの中国に関心を持つ人々に読み継がれ、さらに多くの意義が見出されるべきであるし、そうなることを心から願う。

《注》

- (一) 藤野真子「田村容子『男旦とモダンガール』二〇世紀中国における京劇の現代化」(中国文庫、二〇一九年 四〇六頁)、『未名』第三十七号、二〇一九年、六十六頁。
- (二) 平林宣和「田村容子著『男旦(おんながた)とモダンガール』二〇

世紀中国における京劇の現代化』『演劇学論集…日本演劇学会紀要』第六十九号、二〇一九年、一二八頁。

- (三) 三須祐介「田村容子著 中国文庫『男旦(おんながた)とモダンガール』二〇世紀中国における京劇の現代化』『中国研究月報』Vol.75 No.6 (No.880)、二〇二一年、三十八頁。

(四) 中塚亮「京劇はどのように二〇世紀という新しい時代に出会い、現代化を遂げたのか」『東方』第四六五号、二〇一九年、三十五頁。

- (五) 加部勇一郎「田村容子著『男旦(おんながた)とモダンガール』二〇世紀中国における京劇の現代化」(中国文庫、二〇一九)、『野草』第一〇四号、二〇二〇年、八〇一八十一頁。

(六) 代表的な研究として、程維榮『中国近代宗族制度』(学林出版社、二〇〇八年)、袁紅濤・張穎「試論」五四、前後対宗族文化的重新審視」(『唐都学刊』第二十一卷第二期、二〇〇五年)、袁紅濤「在：国家、与：個人之間…論二十世紀初的宗族批判」(『天府新論』(二〇〇四年第五期)などがある。

(七) 拙稿「一九二〇年代初頭の広東鄉村社会——宗族からみる陳炯明の地方自治政策」『史林』九六卷四号、二〇一三年。

(八) 山本真『近現代中国における社会と国家——福建省での革命、行政の制度化、戦時体制』創土社、二〇一六年、一六八—一八三頁。なお、同書を宗族の視点から読み解いた書評として、拙稿「伏流する宗族の視覚化…山本真『近現代中国における社会と国家——福建省での革命、行政の制度化、戦時体制』を読んで」(『華南研究』第四号、二〇一八年)がある。

(九) 蒲豊彦『闘う村落——近代中国華南の民衆と国家』名古屋大学出版会、二〇二一年。同書の書評として、拙稿「近代中国の基層社会を生き

た人々のしたたかさ——さまざまな新史料を用いて、リアルな実態を描き上げる」『図書新聞』三四八二号、二〇二一年二月六日）がある。

(十) Artur Waldron, *From War to Nationalism: China's Turning Points, 1924-1925*, Cambridge University Press, 1995, p. 279. 趙妍杰『家庭革

命：清末民初読書人的憧憬』社会科学文献出版社、2020年、126-136頁。

(十一) 拙稿「一九二〇年代広東における宗族の自己改革論——五邑地域の族刊雑誌からみる」『立命館東洋史学』第三十九号、二〇一六年。

(十二) 拙稿「清末民初期・信宜県の宗族結合と革命」『華南研究』第七号、二〇二一年。